

自然誌 だじり

Natural history

秋

三重自然誌の会情報誌 134 号

2022年 12月

鹿斥候，現る！

人の生活域への野生動物の侵出が著しく，とくにシカの拡張は顕著である．彼らにしてみれば，もとは自分たちの領分であるので返してもらおうという，本能の声に従っているのであろう．私の仕事場は，堀坂山や観音岳から東延する山麓と伊勢平野の境付近にあり，野生と人のせめぎ合いの最前線にある．山麓には，5～6年前からシカが出没するようになり，林つたいに徐々に平野側へと侵出している．その結果，山麓の水田やミカン畑は柵内での営農を余儀なくされている．いつかは平野部の水田にも現れるものと思っていたところ，9月30日午後，窓下にある溜池の堤を大きな黒い物体が横切ったのが目に入った．顔を上げて堤の方をみると，雄シカ1頭が堤を駆け下りて，2番穂の伸びた水田に入るところであった．少し東に向かってから北に進路を変えて大豆畑を抜けて西方向，すなわち山側に進路を変えて果樹園の中に消えていった．数分間の出来事であった．そのようなすは，戦国武将が馬を駆って敵陣に入り込んで偵察する動きと（実際に見たことはないが）まさに同じであった．偵察でどのような判断を下したのか知るよしもないが，当夜，団地裏手の林からシカの嘶きが聞こえていた．



写真 八重田地区の水田・大豆畑を駆け抜けるシカ（2022年9月30日14時30分頃）

（清水善吉：松阪市日丘町1386-17）

熊野市飛鳥町大又のキイハナネコノメは新変種のトツカワハナネコノメでした

山本和彦・三谷有幸

筆者らは、熊野市飛鳥町大又において、2021年3月下旬にキイハナネコノメ (*Chrysosplenium album* var. *nachiense* H. Hara) の新たな産地を発見したとして本誌128号で紹介しました(山本・三谷2021)。その後、当時標本を同定していただいた人間環境大学の藤井伸二氏による再同定の結果、キイハナネコノメではなくトツカワハナネコノメ (*Chrysosplenium album* var. *totsukawaense* J.Oda & Nagam.) であることが判明しました(写真1)。

トツカワハナネコノメは2020年にシロバナネコノメソウ (*Chrysosplenium album* Maxim.) の新変種として発表された種で、名前が示すように、奈良県十津川村を中心にして三重県南部から和歌山県北部にかけての紀伊半島中央部付近に分布しています(織田ら2020, 図1)。トツカワハナネコノメはキイハナネコノメによく似ていて、萼片(白い花のように見えるのは全部萼)が白くその先端は丸くなっていますが、雄しべや花柱が萼片を突き出ることによってキイハナネコノメと区別されます。これらの特徴は開花初期によく現れ、時期を逸すると雄しべが脱落し、同定が難しくなります。

トツカワハナネコノメの三重県における生育地は熊野市五郷町高尾谷の記録がありますが(織田ら2020)、今回、採集標本の再同定により高尾谷より東方に約7km離れた大又の溪流で新たな産地が追加されることになりました。さらにその後、筆者の一人三谷は熊野市飛鳥町小又で、池田博氏は尾鷲市南浦の溪流沿いでそれぞれ新たな産地を発見し、三重県内のトツカワハナネコノメの産地記録は4ヶ所となりました(図1)。なお、小又産は織田二郎氏に尾鷲市産は藤井伸二氏にそれぞれ同定していただきました。これらの新産記録により熊野市飛鳥町大又が現在のところトツカワハナネコノメの東限の産地となっています。

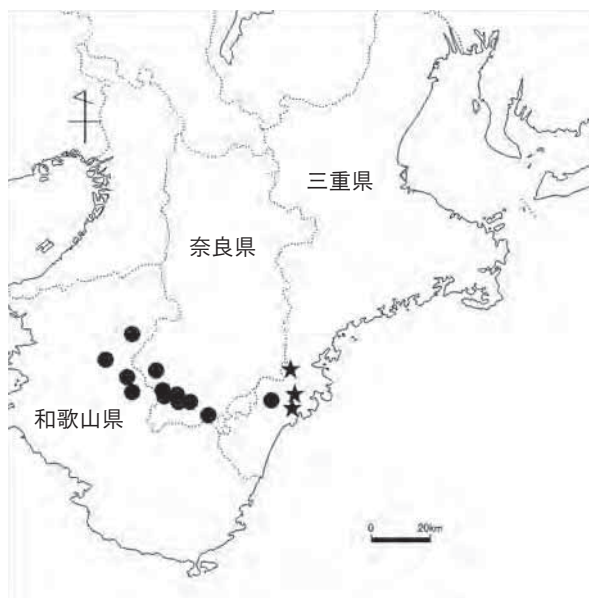


図1 紀伊半島におけるトツカワハナネコノメの分布。
●：織田ら(2020)により確認された生育地(織田らによる分布図より抜粋)。
★：今回新たに確認された生育地。

文献

織田二郎ほか 2020. 紀伊半島のシロバナネコノメソウ(ユキノシタ科)の分類学的研究. 植物研究雑誌, 95 (4), 193-210.
山本和彦・三谷有幸2021. 三重県におけるキイハナネコノメの新たな産地. 自然誌だより, (128), 6.

(やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-4, みにに ありゆき：岐阜県羽島郡笠松町田代1028-5)

トツカワハナネコノメを同定していただいた人間環境大学の藤井伸二氏と織田二郎氏、新たな分布情報を提供していただいた池田博氏、紀伊半島のネコノメソウ類についてご教示いただいた市川正人氏にお礼申し上げます。



写真1 熊野市飛鳥町小又で確認されたトツカワハナネコノメの花(2021年3月23日)。

ニホンヤモリの潜水行動について

上 田 利 彦

自然誌だより85号（上田2010）で既報のとおり、我が家周辺には多数のニホンヤモリが生息しています。去る8月29日に淡水魚を飼育するプラタライでヤモリの潜水行動を確認したので報告します。

午前9時過ぎタライに近づいたとき何かがタライに飛び込むのを確認、最近トノサマガエルが住み着いているので一瞬カエルかと思いましたが、違う気がしてしばらく様子を見ていたところ水面に顔を出したのはなんとニホンヤモリでした。水面を移動し縁から上がろうとするヤモリを手で行く手を遮ったところ、再度水面下に潜り32秒後30cm程移動し再び浮かび上がってきました（写真上）。1回目の潜水時間は、私が少し離れたところで飛び込むのを確認後、観察しやすい位置に移動する間もありましたので、さらに長かったと思われます。その後、同じことを繰り返しましたが、一瞬潜ることはあるものの潜水するまでには至りませんでした。

浮かび上がったニホンヤモリの体表は撥水状態にあり、また水面を移動するのも浮いている状態であることから（写真下）、その軽い体で潜水することに驚きました。2回目以降はこちらから逃避行動を促す形でしたが、一回目は脅かしたわけでもなく、近づいてきた私の姿に驚いたにせよ、わざわざ水の中に逃避をしなくても周りには逃げ込む隙間はたくさんありますので、やはり自ら好んで水に入ったものか、もしくは水中を有効な逃げ場としていたのかもしれませんが。

これまで、同様の爬虫類の潜水としては、2009年5月に嬉野合ヶ野町の山間の溪でニホンカナヘビが潜水しているところを見たことがありました。カジカガエルを観察中に小さな淵で水中から浮かび上がったところを確認したもので、一回上陸後に再び潜水していました。その時のニホンカナヘビは潜水して水底にしばらく動かずにいました。その時間は、ほんの10秒足らずだったと思います。また、上陸後はしばらく岩の上でじっとしていました。この時も再び水のほうへ追ってみました。水辺に近づくことはなく、また、その動きは明らかに鈍く、おそらく体温の低下によるものと思われました。

さて、ニホンカナヘビとニホンヤモリでは同じ爬虫綱有鱗目でも体表の鱗の状況も触り心地も大きく違います。ニホンヤモリは不明瞭な顆粒鱗でフワフワした軟らかい体表であるのに対しニホンカナヘビはざらざらした固い体表で、体重も違うように思われます。なので、今回のニホンヤモリの行動は想定外でした。ニホンカナヘビの観察は5月9日、今回の観察は8月29日午前中で猛暑続きの後、久しぶりに涼しい日でした。それを踏まえると上がりすぎた体温を下げるための水浴ではなさそうです。とすると、好んで潜水していたものか、あるいは私が知らず知らずのうちに驚かせたための逃避行動か定かではありませんが、いずれにせよこの両種は潜水が得意ということには違いないでしょう！

（うえだとしひこ 津市久居一色町176-1）



写真 上：水中を移動するヤモリ、下：水面を移動するヤモリ

アオマツムシは減っているか？

中 西 元 男

河北（2022）は地域における外来昆虫の消長を、三重県については県域未侵入で近い将来侵入が予想されるもの、既に侵入し分布拡大途上のもの、ほぼ全域に拡がったもの、その後衰退して絶滅したものの4段階のステージとした。そのうちのアオマツムシ *Triljalalia hibinonis* (Matsumura) については第三段階にある種としている。

本種を始めて県域から記録したのは橋本（1960）で、その後、杉浦（1969）、同（1980）により、伊勢市神宮及び周辺の地域での分布拡大が報じられた。本種が外来昆虫であり主として人為的環境に多いため、いわゆる「虫屋」の関心が低いこと、また直翅系が研究者、愛好者の少ないマイナーな昆虫群であることから、その後の伝播拡散様相の追跡記録は十分と言えない。

松阪市では1991年に国道42号線での鳴き声を坂部（1992）が報じているが、筆者の居住地新町など中心市街地にいつ頃侵入し、増加したかはつまびらかでない。筆者が身近な昆虫の初見終見、初聞や終聞を年毎に記録し始めたのは、中西（1992）からで、この中では本種に触れていない。こうした記録は普遍的なものについてしか意味をなさず、例えば数年に一度現れるようなものなら、記録はそれが該当種の出現期として年初（または年終）かどうか判定困難であり、報告する意味がない。ここで扱った1991年には、まだ筆者自宅付近のアオマツムシがさほど普遍的でなかった可能性が高い。

翌1992年の動向を記録した中西（1993）では、早くもアオマツムシ初聞を取り上げていて、急速にありふれた虫になったことを示している。この頃筆者自宅付近のアオマツムシは極めて多く、街路樹のイチョウから降り注ぐ鳴き声は騒音並み、夜間に外を眺めると 街灯の周囲を飛び回る個体は何頭もみられた。

この初見など動向報告は現在も継続中であるが、2019年から初聞記録地が自宅でなくなったり（つまりどこかへ出かけ初めて聞ける状態）、2020年には自宅から年間2度しか聞けなかったことを記録している（中西2021）。松阪市新町では1990年当初から30年間で急速な増減があったことが、不完全な記録からであるが読み取れる。原因としては、街路樹のイチョウが古くなり本種の食餌に適さなくなったことによる離散なども考えられるが、なお人家の庭や付近の空地に当時本種が群れていたサクラなどの樹木も現存するから、地域個体群そのものが減少傾向にあるとみて間違いないと思われる。

外来侵入昆虫（国内外を問わず）が、当初急激に増加しその後減少に転じる傾向は、松阪市市街地での北上分布拡大種ナガサキアゲハなどに顕著で、アオマツムシも第三段階、普遍的拡散の末期に差し掛かっているのではないかと思われる。2022年秋、筆者自宅では9月末現在まで一度も鳴き声を聞かない。しかし、9月9日の三重昆虫談話会サロン時には津市一身田の県文化センター付近で盛んに鳴いており、本種の性格上県域絶滅に至るとはよもや考えられないが、各地の動向を丹念に記録する必要があると思われる。

念のため、9月30日夕方、自転車で松阪市内を回ってみたところ黒田町、茶与町で1頭または少数、国道42号大黒田町西信号付近でかなりまとまった数の鳴き声をきくことができた。

文献

- 橋本太郎1960. 神宮宮域産生物目録Ⅶ昆虫類. 神宮農業館, 伊勢, 58p.
河北 均2022. 三重県に侵入した外来種の直翅類. 自然誌だより, (133), 262.
中西元男1992. 1991年初, 終, 見, 聞あれこれ. ひゃくとりむし, (100), 1196-1197.
中西元男1993. 1992年初, 終, 見, 聞あれこれ. ひゃくとりむし, (110), 1313
中西元男2021. 2020年松阪市新町のアオマツムシ. ひゃくとりむし, (477), 5721.
坂部元宏1992. アオマツムシ生息地の記録 (1991年). ひらくら, (315), 47-48.

杉浦邦彦1969. 伊勢市内のアオマツムシについて. ひらくら, (145), 1-10.

杉浦邦彦1980. 伊勢神宮境内地とその周辺におけるアオマツムシの発生動向. 神宮境内地昆虫調査報告書, 神宮司庁, 伊勢, 493-521.

(なかにし もとお: 松阪市新町959)

シイの実拾い

河 北 均

シイは照葉樹林で最も馴染みの深い植物である(写真1). 植物の分類については素人なので, 詳しくは知りませんが, ブナ科クリ亜科シイ属に属し, 日本列島にはスダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba subsp. *sieboldii* とツブラジイ(コジイ) *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky の2種のようなものである(写真2). マテバシイ *Lithedulis ocarpus* (Makino) Nakai は名称こそシイだが, 属が異なり, いわゆるシイ類ではありません. スダジイとツブラジイは幹, 葉などでも識別できるが, 筆者のような素人目には堅果, いわゆる“どんぐり”で見るのが一番確実である. 黒褐色の堅果は, スダジイは細長く, ツブラジイは丸みを帯び, 一目瞭然です. 一般的にブナ科植物の堅果はアクが強く食糧には望ましくありませんが, シイは縄文時代から食糧として利用されてきたと言われています.

筆者が住んでいる南勢地方では, 社寺林, 公園などシイの木が多く, 里山の恵みであるシイの実拾いが普通に行われてきました. 世の中, 豊かになったせいか, 近年は高齢の人がシイの実拾いしているのをたまに見かける程度で, こうしたことも時代とともにすたれていくものだと感じました.

難しいことをいうと, 森林法上問題がある…と慣習法を無視する成文法原理主義者が言うかもしれないが, その議論はさておき, どうやって調理するかというと, 以下のとおり簡単です.

1. 拾い集めてきたシイの実を, 水いっぱい入れた洗面器に入れます.
2. 浮いてきたシイの実は, 虫害等により中味がなくなっているのので, 取り除き, 沈んだものだけ残します.
3. 選別の終わったシイの実を銀杏煎り器(豆煎り器・あられ煎り器)で軽く煎ります. 生でも食べられますが, 煎って外皮がはじけるぐらいが香ばしくて美味しいでしょう.

シイの実拾いについては, 古くから日本各地で行われてきたようです. 伊豆諸島の三宅島へ行った時, 民宿の女将さんがたまに帰郷する息子夫婦(本土の都会在住)や孫のことで, シイの実拾いも知らんと嘆いていました. 三重県から遠く離れた伊豆諸島だけど, 同じような里山の文化があるものだと感心しました.

ささやかだけど, こうした里山の文化は時代ともに日本国中どこでも衰退してゆくようです.

末筆ながら, 写真を提供いただいた清水善吉氏に感謝します.

(かわきた ひとし: 伊勢市岡本1丁目17-18)



写真1 田上大水神社のシイ林



写真2 ツブラジイの実(左の大きなドングリはクヌギ)

キマダラカメムシが我が庭に

篠 木 善 重

本誌112号で筆者は外来種のタイワンタケクマバチの分布拡大を報告しましたが、この外来種については虫屋たちから今なお県内分布拡大の報告が続いています。近年では、カメムシ科の外来昆虫が分布を急速に拡大していて、三重昆虫談話会の会誌「ひらくら」誌上を賑わしています。その虫が今回報告するキマダラカメムシ *Erthesina fullo* です。大型の美麗種で、しかもサクラやカキなど25種類もの植物に幼・成虫が寄生することですから、目視により非常に見つけやすいカメムシです。本種は、国外では台湾、東南アジアや中国などに分布していますが、原産地はマカオ、ルソン、ベトナムあたりと考えられており、17～18世紀に南蛮船に乗って長崎の出島に侵入して九州で分布を広げていったようです。ですが、本州や四国などで見つかったものは台湾からの移入によるものと考えられています。県内では2015年に名張市で初確認されて以来、これまで伊賀市、四日市市、津市、鈴鹿市、亀山市、菰野町で見つかっています。

今秋、我が家の庭に植えられた樹高5mを超えるモクセイ科ヒトツバタゴ *Chionanthus retusus* (別名ナンジャモンジャノキ) の日当たりの良い葉上で成虫3頭と5齢幼虫1頭(写真1)を見つけ、その内の体長20mmの成虫1頭(写真2)を採集しました。卵は見つけれませんでした。ヒトツバタゴの周辺にはかんきつ類などの果樹が所狭しと植えられているので、卵が発見されるまではヒトツバタゴが寄主植物と断定することはできません。まさか自分が植栽した樹木で見つかるとは、どうやら県内ですっかり定着している感があるので、用語の定義は定かではないものの、外来種と呼ぶより帰化種または帰化昆虫と呼んだほうが似つかわしいと思います。

本種の県内の分布域は今後も拡大を続けていくことは間違いなく、未記録の市町からの発見報告を虫屋たちが先を競っていくことでしょう。

採集データ：1頭、津市河芸町中別保、30-IX、2022、筆者採集保管。



写真1 キマダラカメムシ5齢幼虫



写真2 キマダラカメムシ成虫

文献

- 間野隆裕2022. キマダラカメムシを菰野町で確認. ひらくら, 66 (3), 57.
西川 浩・大島康宏2022. 亀山市で確認されたキマダラカメムシ. ひらくら, 66 (2), 39.
篠木善重2022. キマダラカメムシを津市で発見. ひらくら, 66 (1), 3.
安永智秀・前原 諭・石川 忠・高井幹夫2018. カメムシ博士入門. 日本原色カメムシ図鑑. 全国農村教育協会, 東京, 208 p.
安永智秀・高井幹夫・山下 泉・川村 満・川澤哲夫1993. 日本原色カメムシ図鑑. 全国農村教育協会, 東京, 380p.

(しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1)

カルガモのつがい

今 堀 聖 史

晩秋のため池などで2羽のカルガモが前後になったり、横に並んだりして泳いでいるのを見かけることがあります。写真1は鈴鹿青少年センターの道伯池にいたつがいで、地味な羽色ですが首から胸にかけての白と体上面の黒褐色、顔の模様と嘴先端の黄色いアクセントが似合いです。ところで、カモ類のほとんどはオスが色彩豊かでメスは体全体が地味な褐色なので識別できますが、カルガモは写真1のように全く同じに見えます。

野外で雌雄の違いを識別できると、冬から早春にかけて見られる求愛行動を観察するとき楽しさが増えます。識別のポイントその1、オスは体がメスよりやや大きく嘴が長い。その2、オスは背から脇腹にかけて羽縁が淡褐色で狭く、背は黒っぽく見える。メスの羽縁は白色味が強く、背は褐色に見える。その3、上尾筒(尾羽の上側にある羽)が黒いのがオス、褐色味があるのはメス。これら三つの識別ポイントは個体差があり、光の当たり方で判別が難しいこともよくあります。一緒に観察する方がいれば、陽だまりで「ああだこうだ」と言いながら見るのは楽しいです。

カルガモを観察しやすいのは街中の公園にある池など鳥が人慣れしている所です。写真2は道伯池のほとりにあ

るヌマスギの木陰で、オオタカなどの猛禽に襲われにくい休息の場です。静かに見ていると岸に近いところにも来ます。木陰は雌雄の識別がしやすいかもしれませんが、道伯池にはカルガモ以外にカイツブリやカワセミ、オオバンやホシハジロ、ユリカモメやカンムリカイツブリが来ている時もあり、トリムコースではカラ類の混群に出会えるおすすめのフィールドです。

カルガモ雌雄の識別や求愛行動(写真3)についてはWEBで検索すると参考になります。

参考図書：氏原巨雄・氏原道明2015. 日本のカモ識別図鑑，誠文堂新光社

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)



写真1 カルガモのつがい(2021.11.17 鈴鹿市道伯池)



写真2 木陰のカルガモ(2021.11.10 同)



写真3 水を飛ばしているオス(求愛ポーズ) 2021.11.17 同



鈴鹿青少年の森湿地整備のお誘い

毎年この時期恒例の作業を2月5日(日)13時～15時の予定で行います。湿地の刈った草を集めて、運び出してもらう作業です。参加希望の方は事務局(清水090-9262-4665)までご連絡ください。

写真は今年10月に観察したシラタマホシクサ

朝の散歩でコウノトリを見た！

中 野 環・西 岡 弘 文



写真1 玉城町世古に飛来したコウノトリ（2022年8月23日）

2022年8月23日の午前6時頃、筆者の一人西岡が、度会郡玉城町世古を朝の散歩をしているとコサギやチュウサギに比べてひとまわり大きい見慣れない鳥が1羽、稲刈りを終えた水田を歩いて餌を食べる姿を見つけました（写真1）。くちばしが長く、翼の一部が黒色でしたので鶴のなかまかなと思い、気にしながらも散歩を続けその場を離れました。20分ほど散歩をして戻ってきた時にも鳥は水田を歩いていましたが、しばらくすると翼を広げて飛び去りました。鳥の名前を調べてみると、上述の特徴からコウノトリであることがわかりました。玉城町世古の水田や水路は、メダカやドジョウ、カエルなどコウノトリの餌になる生物が豊富ですが、コウノトリを確認したのはこの日だけで、以降はみかけませんでした。離れた場所からの観察でしたので足環の有無は判らず、写真も小さいですが、玉城町に飛来したコウノトリの記録として報告します。

最後になりますが、三重県総合博物館の田村香里さん、長崎恵理子さんには文献の収集についてご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

（なかの たまき、にしおか ひろふみ：玉城わかば学園）

事務局から

○2023年会費納入の御願い

本会の会費は前納制です。納入状況を同封しますので、未納の方は1月末までに振込を御願いします。なお、毎年数名の方が3年間会費未納で退会扱いとなっております。退会は自由ですし、別に気を悪くもしませんので、過去の未納を精算した上で退会連絡を御願いします。なお、現在の会員数は125人、また、県内外の関係機関約80か所に会誌・会報を寄贈しています。

編集後記

河北さんの原稿を読んでいてシイの実が食べたくなり、近くの阿射加神社に採集に行ってきました。ツブラジイを茶碗に一杯ほど採ってきて、水につけて虫食い実ははじいてから煎って食べました。チマチマと食べなければならないので時間がかかるのが難点ですが、上品な甘みがあっておいしかったです。ついでに、這いだしてきた幼虫も煎てみたら、こちらも美味でした。子供時分に、近くのお宮さんで生を食べたのを思い出しました。ただ、子供ではないと感じたのは、探すときに立ったままでは落ちたドングリがみえないのです。メガネ（老眼鏡）をかけて這いつくばるとなんとか探すことができる寂しい状況でした。来年3月発行予定の冬号への投稿をお待ちしています(善)。

自然誌だより134号 Mie Natural History Research Group News, No.134

発行日 2022年12月15日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp